

---

# Crocodile dream

uko

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

C r o c c o d i l e   d r e a m

### 【Nコード】

N 8 6 9 8 C

### 【作者名】

u k o

### 【あらすじ】

アイドルに自分の人生を預けた25歳の女。自分の人生に真っ直ぐに向き合えない彼女を取り巻く人間にはそれぞれに同じ様に逃げ出したいくらいの現実がある。『彼の全てを見つめるんだ、愛することはよく見ることだと思うから。』

1 - s a t o k o -

透明なクロコダイルが私を甘く噛む

苦しみの中であたしはささやかな夢をみる

1 - s a t o k o -

「ほら、やっぱり朝が来た。」

この世は誰にも均等に残酷だ。  
そういうもんだ。

薄いクリーム色のシートから滑り起きる。

「早くしなきゃ」

色々なこと、早くしなきゃ。

朝食は紙パックのフルーツオレとお徳用のスナックパン。  
美味くも不味くも無い。  
グラスも皿も使わない。  
だって洗うのが面倒だから。

「紙パックは資源ごみ、ストローは燃えないゴミ・・・」  
胃に流し込んだら、シャワーを浴びる。  
休む暇なく。

「早くしなきゃ」

時間が無いわけじゃない。  
でも時間に追われるということに救われる。

一息つくと一瞬で嫌になるから、今日という1日が。

シャワーを浴びると寒々とする季節が来た、と思う。  
シャンプーの匂いが漂う髪の毛を手早く乾かして、  
下着姿のままベッドに座り込んで化粧をする。  
滑らかなシーツは気持ち良い。  
あたしには眩しすぎる朝の陽よりずっとずっと気持ち良い。  
「・・・早くしなきゃ」

あの人は純白の白い下着が好きらしいから。

清純なイメージなのだろうか？  
男も女のように妄想しているのだろうか？

そうだとしたら、人間は性別に関係なくすべての人間が妄想にふけ  
っていることになる。  
みんな現実逃避しているのにどうして、この世に生きる意味がある  
のだろう。

化粧はナチュラルメイクを心掛けている。

あの人はそれが好ましいから。

ナチュラルメイクっていうのはしっかりメイクをするよりずっと手  
が掛かると思う。

白い下着しか履かずにナチュラルメイクをする女に、清純なやつな  
んていないと思う。

化粧が済んだらすぐにその辺にある服を着る。

あの人は服装にはこだわらないらしいから、なんだっていい。

スカートを履く。

大抵の男性はスカートが好きだから、

あの人もそうだといひ。

男は脚が好きなんだ。

少しくらい太くたって、脚が好きなんだ。

生脚ならなおいひ。

いろいろなことが理にかなってない。

でもそういうもんだ。

低くもない高くもないヒールの靴を履いて、勢いよく玄関のドアを閉める。

隣の女は昨日の夜もまた男と楽しそうに笑っていた。

週に2度必ず男を連れ込む。

火曜と金曜の夜。

不倫じゃないかと睨んでいる。

男は汗臭い不細工なオヤジ、

だったらしいなと思う。

それにしたってきつと話し上手な男なんだろう。

じゃないとあんなにあっけらかんとは笑えない。

週に2度、壁越しの彼女は幸せそうだ。

でも隣の女は他の週5日は幸せには程遠く憂鬱に過ごしているんだ。

ろうと、

あたしは信じている。

ガチャン・・・

鈍い音をたてて鍵が閉まる。

駅まであの人の優しい声を聴こう。

耳の奥で響く色のある声色が、ひねくれたあたしの全てを溶かしてくれる。

つまらないあたしの人生をあの人が救い出してくれる。

破滅的につまらない仕事だと思う。

ただ、仕事をしないとあの人に会えないから。

その為になんの価値もない時間を1日8時間も過ごしている。  
価値を見いだせないのは私自身なんだけど。

誤字脱字だけに注意をはらって、あとは無心にキーボードを叩く。

その内に足が溶けて床と一体化してしまうんじゃないかと思う。

まだ子供だった頃、横断歩道の白線を踏み外すと大きな口を開いたワニに内臓がズタズタになるまでかみ砕かれると信じていたように、

このオフィスにも透明なワニが居ると本気でそう思う。

だからヒールのかかとは床に着けたらいけない。

ワニの歯は鋭い。

ガブリだ。

ガブリコリコリだ。

・・・ワニ吉さん、私の内臓の歯ごたえはいかがですか？

人間のほとんどは水分みたいだから、  
去年の社員旅行で泊まった旅館の夕食で出た白子の天ぷらくらいかな？

「・・・はぁあ」

そういうグロテスクな妄想を膨らませていると大概は誤字脱字をする。

人間は反省する生き物だ。

ワニ吉とはしばらく距離を置こう。

もう大人なんだから。

他人によく言われることを自分にも言ってみる。

「サトコちゃん、コーヒー入れて。」

ワニ吉と決別した私に篠原さんが声をかける。

「はい。」

・・・篠原め。

いやいや、お茶でもコーヒーでも入れますよ。

どうってことない。

こっそり秘密の白子を入れてあげよう、篠原さん。

かかとを着けてもワニ吉は冷たい床の中で眠ったままだ。

熱帯地域に生息するあんたがこんな冷たい床で生きてるなんて。

あんたの根性には圧巻だよ。

どうしたら謙虚に逞しく、現実を生きれるのか、あたしに教えてよ  
ワニ吉。

五時になったらマッハで帰る。

マッハだ！

マッハってどの位の速さなんだか知らないけど、とにかくマッハなんだ。

マッハ！

会社から出たらあの人の声を聴く。

少し汗ばむくらいの早歩きでいつものスーパーへ向う。

今日はレトルトカレーを買う。

一番安いやつ。

それもあの人と会う為。

そう思うとなんて人生は素敵なんだろうと思う。

ああ、人生は素敵。

福神漬けに手を伸ばそうとした自分を強く叱って家に帰る。

贅沢は敵だ！

家に帰ったら、シャワーを浴びる。

パソコンを起動する。

洗濯機を回して、お湯を沸かす。

そしたら今日初めて一息つくんだ。

世の中の大抵の男は煙草を吸う女を嫌うだろうけど、  
いや、あの人はきつと嫌うだろう。

それでも煙草だけは止められない。

仕事も外食も福神漬けも夜遊びも贅沢も恋人も我慢するからそれだ  
けは許してね。

そんなあたしは最低な女だと思う。

それでも仕事が終わった後のメンソールの煙草は死んでもいいくらい気持ち良い。

パソコンが起きた。

おはよう、心の友よ。

遅く起きるのって最高だよね、もう午後8時だけど。

あと一時間後にはあの人に会える。  
素晴らしい時間。

地デジは最高だ。  
何たって画質がいい。  
地デジってなんのことだかよく知らないけど。

録画はリアルタイムで行う。  
無駄なテレビCMをカットするんだ。

あの人にはシンプルっていう言葉がよく似合う。  
無駄なものはいらないんだ。  
あの子の美しさにテレビCMはいらない。

ま、私の自己満足だけど。

後47分25秒であの人に会える。

手が汗ばむ。顔がにやける。

人生は素敵だ。

これは恋だと思う。

誰がなんと言おうと恋だと思う。

そして恋からは愛が芽生えたと信じている。

そう信じている

「お湯。お湯・・・」

レトルトカレーだ。甘口だ。

人生は素敵だ。

レトルトカレーは美味しいから、  
やっぱり人生は素敵だ。

15分前から液晶テレビの前に座り込む。  
洗い物は済ませてしまおう。

でも手がカレー臭い女はあの人が嫌うだろうか？

嫌うだろう…手がカレー臭い女を好む男がいるわけがない。

でも人間の姓癖って簡単に常識を越えるからな・・・  
家庭的と言えば家庭的のような気もする。  
というかあの人はカレーは好きだろうか？

カレーが嫌いな人間なんかいるのだろうか…

しかし決めつけてはならない。

彼の全てを見つめるんだ。

愛することはよく見ることだと思うから。

よし、後でネットで調べてみよう。

9時から、あの人の出る歌番組が始まる。

私はその為に生きているんだ。

人生は素敵だ

^<U>^

2 - s i n o h a r a -

一度落ちたら逃れられない

クロコダイルの住み着くその穴に

2 - s i n o h a r a -

生意気な女は可愛い 彼女を見ていると思う。

そりゃ顔は美樹ちゃんのが可愛いし

高丸さんの方がずっと感じが良い

高丸さんは相槌の打ち方が丁寧だし 清潔感がある

それを思うと彼女は実に愛想が悪い。

顔だつて並だ

髪の毛は肩で揃えただけの何てこと無いスタイルだし  
化粧も素っ気無い

しかし 彼女はふちの無い眼鏡が良く似合う。

彼女はいつもここにいない  
僕らの知らない別のどこかにいる

そのどこも見えていないような瞳は  
美樹ちゃんの整った顔立ちや  
高丸さんのキラキラ光る爪よりも

ずっと美しいと思う。

「サトコちゃん、コーヒー入れて。」

声をかけた

いつもコーヒーは彼女に頼む  
大概のことは無視されるが コーヒーだけは入れてもらえる

出来るだけ  
たまたま側にいたからお願いしちゃお  
という雰囲気を出すのがコツだ。

「はい。」

なんて無愛想な返事なんだ

天才的だ。

しかも

彼女の入れたコーヒーは素晴らしく不味い

コーヒーの薄さが彼女の僕への興味の無さを物語っている

嗚呼不味い 今日も不味い

きつと今日も5時3分前から小さな声でカウントダウンして  
5時を回ったら小走りで帰るんだろうね・・・

もしタイムカードを押し忘れたら、  
こっそり押してあげるからね。

^ ^ u u ^

3 - h i k a r u -

クロコダイルの皮を剥ぎ

特製の毛皮を着せてあげよう

そして誰にも見つからない場所へ逃げるんだ

3 - h i k a r u -

黄色い歓声

馬鹿みたいに眩しい照明

ピエロの様に派手な衣装

眩暈がする

眩暈がするんだ

いつの間にか見失ってしまった

自分はもつと上手に生きていける部類の人間だと思っていた。  
でもそれは大きな間違いで  
今、

今俺は、  
何もやる気が起きない。

朝から晩まで、  
いくつかの決められた人間と  
いくつかの決められた場所で  
いくつかの決められた仕事をする。  
それはとても、息苦しい。

浩一郎がまたスタッフを怒鳴りつけている。  
用意された衣装が気に入らないらしい。  
確かにセンスの欠片もない。  
真っ赤な生地に大量のスパンコールで飾られている。

何だよこれ

ああ、そうだ。  
子供の頃、祥子さんの黒いピアノ鍵盤の上にあった、  
あの赤い長いフェルト。

あの色によく似ている。

鍵盤に悪戯しようと冷たく硬いイスによじ登った。

勢いよく俺に手の上に鍵盤の蓋が落ちてきた。

それはとても重く、小さな子供の掌に押し掛かった。

どのくらいの程度の怪我で、

どのくらい自分が泣いたのかは忘れてしまった。

ただ運ばれた病院の薬品臭い廊下や、

看護婦さんの冷たくて気持ちのいい指先は覚えている。

白と黒の鍵盤の上に生暖かい真っ赤な血が流れ出る  
鍵盤と鍵盤の間に染み入る

人間の血はクレヨンの赤よりずっと濁っている

子供ながらにガツカリした。

そうだ。

人間の内部にはどす黒い血液が流れてる。

もう沢山だと思う

何もしたくない

それでも9時には歌番組の生放送があるし、  
きつとそれを投げ出す勇気も気力も無い。

今年で27歳になる、いい歳をした浩一郎と俺が、  
カメラに向って爽やかな笑顔を見せるんだ。  
反吐が出るくらいの爽やかな笑顔。

ピエロになる。

殺す価値など無い心を殺して。

あの日、

ピアノの鍵盤の蓋を落としたのは祥子さんだった。

>  
じ  
く  
<

4 - s a t o k o 2 -

4 - s a t o k o 2 -

今日のあの人も今までのどんなあの人より素敵だった。

あの人の魅力で完全にドライアイだ。

シバシバシバシバする。

目が、

あの人は誰の物でもない、  
もちろんあたしの物でも。

あの人は嘘をつかない、

絶対に恋人はいない。

あの人は歳をとらない、

・・・いや、とる。

だから余計に美しいんだ。

散々選んで買っても、切り花は枯れてしまう  
素晴らしい映画も、エンドロールは必ず流れる

何度も繰り返し呼んだ小説も、何度読んでも必ず最後のページが現われる

大好きだった鈴木くんも、別の女と結婚した

でも、失くなるから

失ったから私はそれらを愛しいと思えたんだ

それでも彼の嘘偽りの無い爽やかな笑顔に勝る美しいモノは無い

いつかあの人も死んでしまっただろうか？

そのときは後を追おうと決めている。

あたしは悲しい女だろうか？

それは考えないことに決めている。

とにかくあの人の素晴らしい瞬間を残しておくんだ。

テレビCMはカットしてね。

みんなが忘れても 私は忘れないように

ねえ、ワニ吉？

あたしは夢に溺れているわけじゃないの

毎日毎日決意してる。

明日こそはきちんと自分の人生に向かい合おうって。

あの人の人生とあたし人生とは別物だってこと

でもお願い、

もうすこしだけ  
もうすこしだけ  
うまく出来ないあたしを見逃して。

ただ  
ただ

あの人が好き

あの人が好きなの。

それだけは信じて。

乾いた目に煙が沁みた

>  
U  
<  
<  
<

5 - s y o k o -

クロコダイルの八重歯は可愛い

可愛くて可愛くて この手で壊してしまいたい

5 - s y o k o -

隣の女は浮ついている  
そう思う。

何度か出かけるところを窓の外に見つけた。

25歳くらいかな、

素っ気無い顔つきにふちの無い眼鏡をかけている。

いつも清潔そうな恰好をしている。

見かけるときはいつも小走り。

いつも同じ時間に出掛けて、いつも同じ時間に帰ってくる。  
気が知れない。

でも結局男はこういう女が好きなんだよ。

でもこの女に絶対男はいない

毎日同じ時間に小走りで帰ってくる女に男がいるわけがない。

p i p i p i p i p i p i

「・・・」

必ず火曜の朝には年の離れた弟から電話がかかってくる。

弟は10代の頃からテレビに出てる。

若い女の子に嘘くさい笑顔を振りまいて金を稼ぐ弟を、  
私は心底軽蔑している。

p i

「何よ、」

『・・・祥子さん？おはよう。』

「何の用？」

『いや・・・どうしてるかなって。ちゃんとご飯食べてる？』

「そんなのあんたに関係ないじゃない。」

『・・・そうかもしれないけど、』

「食べる。」

『良かった・・・仕事は？』

「してるわよ。」

『・・・そうだよね。』

「あんたみたいに稼ぎが良くないから、働かないと暮らしていけないの。分かる？」

『・・・うん。ごめん。』

「謝らないで、余計惨めになる。」

『でも・・・祥子さんの仕事だって素敵な仕事だと思う。』

「お遊びみたいな仕事してる人間に何が分かるわけ？」

『・・・』

「じゃあね。」

『祥子さん！あの・・・明日の夜9時に歌番組に出るから。』

「・・・」

『もし時間があつたら・・・見て、下さい。』

p i

「・・・」

仕事は点字点訳師をしている。

弟と違い、働いても働いても満足な収入は無い。

一日中この狭い部屋に居なきゃいけないのも苦痛だ。

私の生きている世界は 息が詰まる程狭い水槽

母は素直に弟からの仕送りを受け取れと言う。

他人に配る程稼いでるんだ。

赤の他人に。

私はホームレスになつたつて弟の援助は受けない。  
受けるもんか。

弟の仕事が気に入らないんじゃない。

金は欲しい。

でも私はあいつが死ぬほど嫌いなんだ。

でも、電話がかかってきたということは今日は火曜日だ。

火曜日ということは彼がやってくる。

「掃除……」

机の上は原稿で埋まっていた。

床にも数枚落ちている。

飲んだまま置きっぱなしになっているコーヒークップが4つも溜まってる。

灰皿には山盛りの吸殻。

ベットの上には脱ぎっぱなしの洋服。

「洗わなきゃ……掃除機……洗濯も」

まだ彼が来るまで丸1日時間がある。

落ち着こう。

まずは煙草を吸おう。  
そうしよう。

「ふうー・・・」

あの貴重面に毎日洗濯している隣の女がこの部屋を見たらどう思う  
だろう？

でもどんなに熱心に掃除したって、我が家のゴキブリがそっち行く  
んだよ。

バーカ バーカ

「……コンドームも買わなきゃな」

掃除が済んだら近くのスーパーへ行こう。  
彼が好きなちくわぶの煮物を作ろう。

^<UJ>

6 - s i n o h a r a 2 -

6 - s i n o h a r a 2 -

17時に出た彼女が、21時に戻って来た。

驚いた

自分の胸が予想以上に揺さぶられたことに。

残業は嫌いだ

ピーマンの次に嫌いだ

でも1人のオフィスは好きだ

熱帯夜のビアガーデン程じゃないけど

このオフィスの床は薄いブルーにグリーンが混ざってる。  
アマゾンの池みたいだ、なんて。

彼女はいつになく焦っていた。

行き切らしながらオフィスに入ってきた彼女は、  
上下ジャージ姿だった。

デープピンクの。

刺激が強すぎる

いろんな意味で。

熱心に残業していた僕のごとはまるで無視して、  
自分の机をかき回している。

「……………忘れもの？」

彼女に僕の言葉が届くわけが無い。

ここまでこの恰好で来たのか？

タクシー？

まさか電車じゃないだろうし・・・

というかそこまで大事なものを忘れたのか？

・・・なんだろう？

サイフ？

部屋の鍵！

いや、ジャージに着替えてるんだからそれはないな？

・・・ん？

いやいや、まさか。

・・・まさかな。

・・・でも

「あの・・・サトコちゃん？」

ガサガサガサガサ・・・ガタン！

「……………」

ガタ！

「もしかして携帯電話探してる？」

ガサ……………」

「いや…………あの、コピー機の上に置いてあったんだけど。待ちつけがさ、」

「み！？」

「え？」

「……………見たんですか？」

「え…………と、」

「見たんですね？」

「みてないです。」

「嘘！今待ち受けてっ！」

「いや！あの…………待ち受けてても誰も取りに戻ってこないから預かっておこうかなあ？て。」

「……………」

「・・・」

「・・・」

彼女は泣きそうな顔をして俺を睨んだ。

コピー機の前で、作り物のような笑顔の男と目があつた。

その携帯の待ち受け画像は、  
美樹ちゃんがカッコイイと騒いでいたアイドルの写真。

好きなのかな？

^ ^ U U ^ ^

7 - s a t o k o 3 -

7 - s a t o k o 3 -

インターネットは便利だ。

今は人の呪い方を調べている。

その前は人の記憶の消し方。

いまいち具体的な方法が見つからなくて、いっそ呪うことにした。

篠原さんを呪ったところで事態は何も変わらない。

分かってるよ

分かってる

分かってるってば

今日はレトルトのハンバーグ

冷めない内にとろけるチーズを乗せるんだ。

そうすると、とろける。

なんて適切なネーミングだろう！

今日の日記に書こう。

今日は土曜日なのに、隣の家に人がきてる。  
きつと不倫オヤジじゃない。  
笑い声が聞こえないから。

大抵家にいる気がする。  
いつも5センチくらい窓が開いてて、グレーのカーテンがはみ出てる。

一度だけゴミだしをしてる後ろ姿を見た。  
鶏ガラみたいに細かった。

ご飯ちゃんと食べてるのかな？

36歳ぐらい？

仕事は何してるんだろう・・・

風俗で働いていてもおかしくない風貌だったけど、  
いつも隣の部屋は朝方になっても光が漏れている。

そんな時間まで家で仕事してるんだとしたら…内職？

まさか、

生活出来るはずない。

あ、でも不倫オヤジから小遣いもらってるのか？

でも小遣いくれるようなオヤジだったらこんな狭いマンションに住まないか…

それに何となくあの後ろ姿には男に頼って生きているような女々しさは無かった。

会社の美樹ちゃんや高丸さんには無い、  
女の哀愁？

そんなのを感じた。

女は女に敏感なんだ

そういうもんだ。

ということは…

漫画家とか？

いや、まさか。

アルバイトだっしてない様子だから、それだけで暮らせるわけがない。

売れない漫画家…

実家が金持ちとか。

30過ぎてまだ親から仕送りもらって…

漫画…官能漫画？

官能漫画なんてジャンルあるの？

エロ漫画でいいや。

エロ漫画家だ。

そうだ。

毎日毎日狭い部屋でエロい漫画描いてるんだ。

大変だろうなあ…

気が変にならないのかな？

女は男と違っていつでも性欲が溢れ出てるわけじゃないんだし。  
そこを絞り出すわけね、仕事だもんね。

男の性欲がかけ流し式の温泉なら、女は循環式…

全然うまくない、あたし。

大変な仕事だね、  
エロ漫画家さん。

そりゃ不倫もするよ…

って、まさかそれも仕事の一貫！？

…それでも

それでもあたしが何の価値も見い出せない仕事より、ずっと素敵だね。

あたしは25歳になってもアイドルに夢中な自分が嫌いなんじゃないの。

美樹ちゃんみたいに男に媚びて高い服で自分を飾ったり、

高丸さんみたいに愛想ふりまいといて裏で陰口叩くような女には絶対なりたくない。

でもどこかで、

そっとうみんなに軽蔑されたくなくて、

独りになるのが恐くて、

胸張ってあの人が好きだって言えない中途半端な自分が嫌いなの。

独りになる覚悟もないのに 人を愛せるわけがない

待ち受け画面の彼は最高に素敵だ。

逃げ出したのは弱い自分を見たくなかったから。

本当に呪いたいのは  
あたし自身

今度生まれ変わったら

とろけるチーズになりたい

熱いハンバーグの上でとろけたら

みんなが喜んでくれるから

^<UJ>

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8698c/>

---

Crocodile dream

2010年11月10日10時52分発行